

コリント人への手紙第二 第7章 10節

「神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」

悲しみが絶えない世に在って生かされている。一時の感情の嵐ばかりではなく、人々の心の奥深く浸み込んだ、なかなか消え難い悲しみがある。悲しみの大きさのあまり、家族が、人生が激変し崩壊の危機に晒される人々もいる。いくら悔やんでも取返しがつかない悲しみがある。その悲しみを抱えながら何十年も生きる。ときに心折られる人々もいる。悲しみには人の数ほどの様相があり、一言では言い表せない現実がある。

ここでは、悲しみの詳細は語られていない。ただ、二種類の悲しみの道があげられている。一つは、神のみこころに添った悲しみの道である。この悲しみは、人生の向きを変えるという。神に立ち返ることを促す悲しみである。自分から神へと向きを変えさせる悲しみの道があるという。この道は、悔いのない、救いをもたらす道である。悲しむが悔のない、救いとなる。

他方、世の悲しみの道を指摘する。この悲しみは、悲しむ者が帰るところが不明の悲しみである。悲しみの道をどこまでも行くだけである。その道が死をもたらすという。悲しみながら死の道、死へと進むのである。

2023年3月11日

(東北大震災12年後の日)